

新	時
美術	
評	
	一 誠 藤 近

昨年10月1日、筆者が学長を務める国際ファッション専門職大学（新宿）のホールで、「世界遺産の歴史と未来像」と題したシンポジウムが開かれた。世界遺産条約が成立してから50年、日本がその枠組みに加入してから30年という節目を記念したフォーラムで、ユネスコ事務局長を10年勤めた松浦晃一郎氏ら専門家が一堂に会して、ユネスコの下にある本条約の意義について議論がされた。

昨年は日本の石見銀山の世界遺産登録15周年、そして今年も富士山の登録10周年という節目でもあり、改めてユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の下

出し、それがテクノロジーの力によって巨大なインパクトをもったに過ぎない。

この状況は、『文明はなぜ崩壊するのか』（レベッカ・コスタ著）の指摘を想起させずにおかない。同書は、過去の偉大な

このまま「先送り」を続けていけば、あるとき突然「文明崩壊」となる可能性を否定できない。

しかし崩壊を防ぐヒントはある。ユネスコ憲章は、永続的平和は政治や経済による取極めのみによって達成できるものではなく、人類の「知的及び精神的連帯」があって初めて保たれていると述べ、文化や教育などでの協力を訴える。その代表的な仕組みのひとつが世界遺産条約である。人類にとって貴重な遺産を、政治や経済等立場の違いを超えて国際協力の下に守るという行動こそが、戦争を乗り越える基盤となることを、国連と同時期につくられたユネスコの

今こそ世界遺産条約の精神を生かすべき時

にあるこの協力の枠組みの意義を考える良い機会だ。

現在世界は長引く新型コロナの感染や、ロシアによるウクライナ侵攻を契機に、国際関係が不安定化し、経済が大きく揺らいでいる。また文明進歩の象徴であるデジタルテクノロジーが、専制国家の市民監視に利用されるなど、世界は深刻な事態に陥っている。

だがこれらは新しい問題ではない。文明が数百年にわたる発展の陰でもたらしてきた自然破壊や、戦後辛うじて抑制してきた人間の欲望、怨念、差別などのネガティブな感情がコロナとウクライナを契機に一気に噴き

創設者たちは予測していたのだ。

世界遺産を登録することが、戦争や差別防止の即効力をもつわけではない。しかし政府や企業が当面の課題処理に終始している中、市民が文化における連帯の努力を怠ることにより、この文明も再び「先送り」で崩壊したと後世の歴史家（あるいは宇宙の高度な知的生命体）に言わせていいのだろうか。

50年の節目を迎えた世界遺産の制度は、遺産の保護や観光収入の増加だけではなく、立場を超えた協力の精神を醸成する貴重なシステムであることを改めて認識すべきであろう。

（近藤文化・外交研究所代表）